

二年前(二〇二三年)にミャンマーを訪ねた際、空港到着後三〇分もたたないうちに、とても満たされた気分になったことがある。空港ビルに入り入国審査窓口へ向かう通路を進むと、頭上からけたたましい鳥のさえずりが降り注いできた。スズメが目立つがハトやムクドリの類も混じっていたように思う。あちこちに巣をかけていてヒナの鳴き声も加わってにぎやかである。飛び交う鳥たちを見上げながら、私は思わず笑ってしまった。もうこれだけで来てよかつたと、楽しい気分になったのを覚えている。

仕事や旅行などでアジアの異文化に長年触れているなかで、私たちはふと忘れがたい、かけがえのないものに出会うことがある。それは、美しいとか心地よい、あるいは楽しい、正しい、というような実感である。それらをここでは『よいもの』、『よいこと』という言葉で集約的に表現しておこう。本書では各著者が自らのアジア体験を通して、心に秘めてきたさまざまな『よい』を紹介している。もちろんアジアには日本を含めている。近代化以前の江戸時代となると、ほとんど異文化世界というべきである。

著者のなかには『よい』を日本での日々の暮らしに应用、実践している者もいる。著

者全員に共通しているのは、心に抱いている『よい』が各人の暮らしや人生の活力になっていることである。さらには『よい』を友人、知人に語りたいという思いに駆られている。多くの人びとと喜びを分かち合いたいという思いが本書執筆の動機である。

日本に暮らす私たちはヨーロッパから多くのことを学び身に付けてきた。衣・食・住を見てもしかり。今日の昼食に食したカレーライスでさえ、イギリス経由なのだから。とまれ先進諸国のなかに地歩を築き、GDPで量る意味での経済力で世界第二位と言われた一九八〇年代に、ヨーロッパ志向のヤマは超えたといえよう。しかし、頂に立つや眼前に広がるのは茫漠とした荒野なのだ。

すでに退職している同僚の一人が、「大学では、アジアへのこだわりを持っていないとヨーロッパ中心になってしまう。」とかつて語っていたことを思い出す。これは、「日本では、アジアへのこだわりを持っていないとヨーロッパ中心になってしまう。」と置き換えても矛盾なく通用する。今日ではがむしやらなヨーロッパ志向は見られなくなつたとはいえ、ヨーロッパ基準は依然続いている。

ここでは心のなかをより解放するために、自分を取り巻く時空を同心円的に想像してみたい。すると自ずとアジア諸国・諸文化や日本の過去が浮上してくるだろう。それら隣人に向かって五感を総動員、いや時には第六感も動員しながらゆつくりと歩を進めてみたい。